96-6

札響くらぶ

創刊準備号

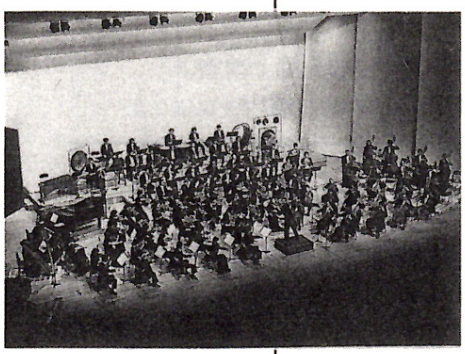
発行／札響友の会
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区北1西13
教育文化会館内
電　話 011-251-4774
ＦＡＸ 011-251-4776

「札響友の会」を作ります。

お友達を誘って下さい。

わが札響は35年の歴史をもち、日本でも有数の実力を備えたオーケストラです。札響は、私達北海道民のもっとも誇りとする芸術文化の発信のプロ集団です。北国の恵まれた自然の中から独特の感性にあふれる音楽を創造しております。多くのファンに支えられ、年間130回に及ぶ演奏活動を道内各地で、また東京や大阪でも定期的に活動しております。札響の主な活動は年間11回の定期演奏会です。1100人の定期会員と一般の人々で、いつも好評を博しております。7月のパシフィック・ミュージック・フェスティバル（ＰＭＦ）にも参加し素晴らしい演奏を聴かせてくれております。

いよいよ来年春には、札幌市音楽専用ホール「ＫＩＴＡＲＡ」が誕生します。その「こけら落とし」の演奏は、わが札響です。この素晴らしいホールでの活動は札響が中心に展開されることになるでしょう。そのためには、もっともっと多くの方に札響の演奏を聴きにきてもらうことが必要です。そして、応援団が必要なのです。



私達はいま、札響応援団としてファンクラブ「札響友の会」をつくろうと考え、皆さまに呼びかけております。その準備として、この「札響くらぶ」をつくりました。

みなさま、一緒に応援しましょう。私達と一緒に活動しませんか。

「札響友の会」呼びかけ人　　山　科　俊　郎

指揮者にきく

地元のオーケストラを気軽に楽しんで…

秋山和慶（あきやま かずよし）さん

札響ミュージックアドバイザー・首席指揮者

1996年4月25日、第379回定期演奏会が終わったあと、札響ミュージックアドバイザー・首席指揮者の秋山和慶（あきやま かずよし）さんに、市民会館の楽屋でお話をうかがいました。

秋山和慶さんのプロフィール
1941年東京生まれ。
63年桐朋学園大学卒業。
64年東京交響楽団を指揮してデビュー。
同団の専属指揮者を経て、68年音楽監督、常任指揮者に就任し、現在に至る。
トロント交響楽団の副指揮者をはじめとして、アメリカ、バンクーバー、シラキュース各交響楽団の音楽監督を務める。
86年札響首席客演指揮者、88年ミュージックアドバイザー・首席指揮者に就任

―― 札幌のお客の反応はいかがですか。

秋山 ウーンなかなか難しいですね。

一口に言ってしまうと、ちょっと静かというか、おとなしいですね。

ただ、時々会って、お話したりすると、みんなとても一所懸命聞いてくださっている。大好きで、大好きで、すごく中に秘めたる情熱を持っているのが、話してみるとわかるんだけど、演奏が終わった後の拍手の反応というのは、ちょっと静かですね。

―― 演奏が終わったあと、拍手が続いて、何回もステージに呼び出されるというのは、指揮者や演奏家の方にとっては、どうなんでしょうか。

秋山 一回で終わってしまえば、ああ気に入らなかったんだなということになるし、拍手というかたちで反応が現われるというふうに思うと、うれしいですね。

僕は、アメリカで演奏したりして、ワァーッという反応に普段馴れているものだから、札幌のお客さんをおとなしく感じるのでしょうけれども、さっきも申し上げたように、けして冷たいのではないと思います。

モーツァルトのオペラ大好き

―― お好きな作曲家を教えてください。

オーケストラなんでもQ&A

Q. オーケストラが調音するとき、必ず最初に吹く楽器は何ですか。

A. オーボエです。オーケストラが舞台にそろったら、コンサートマスターが立ち上がって合図をし、オーボエがA（アー、ピアノの鍵盤の中程にある白鍵のラ）の音を出して、これにあわせて調音します。弦楽器の場合、ヴァイオリンからコントラバスまで4～5本の弦のどれかがA線なので、先ずオーボエの

秋山　モーツァルト、それから、リヒァルト・シュトラウス、マーラー、もちろんブラームスも。

――　どんな曲がお好きですか。

秋山　これは難しいね。レパートリーにしているのは、800曲くらいあるわけだし。

もう、いつでも、どこでも、やりたい曲というのは、モーツァルトのオペラね。フィガロの結婚とか、ドン・ジョヴァンニ、魔笛、コシ・ファン・トゥッテとか。

――　ご自分では、どんな楽器を弾かれるのですか。

秋山　自分で弾くのは、ピアノとフレンチホルンです。

――　札響に向いていると思われる、作曲家や曲の傾向というのは、どうでしょうか。

秋山　それを限定しちゃいけない。これからはオールマィティで、何でもやらなくちゃいけない。

――　よく、チャイコフスキーとか、北欧の作曲家と言われますが。

秋山　それは、もう30年前の話です。

幅広いレパートリーが必要

――　これから、もっとたくさんの人たちに、札響を聴いてもらったり、定期会員になってもらうために、音楽の楽しさを伝える方法や、札響のＰＲの仕方について、どのように考えていらっしゃいますか。

秋山　これはもう、世界中そうなんだけれども、お金と結び付いてしまう。

演奏曲目のことについても、本当に大がかりなものとか、ちょっと仕掛けのいるようなものというのは、すぐ人が増えたり、舞台の装置が必要だったり、何百万円・何千万円という費用が一回にかかっちゃうわけだから。

あと、演奏の面では、さっき言ったように、バラエティをより富んだものにするということがあります。チャイコフスキーだって、６曲しかシンフォニーはないわけなんだから、毎回やるわけにはいかない。シベリウスだって、７曲しかない。

モーツァルト像

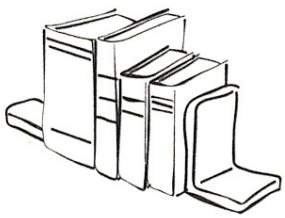
本当にワイドなレパートリーをこれから確保していかないと、幅広い層のお客さんに聴いてもらえない。

僕は、1972年から13年間、カナダのバンクーバー交響楽団の指揮をしたんですが、クラシックのシリーズのほかに、名曲シリーズ、いろんな超一級のジャズの人たちを呼んでいっしょに演奏したりするポップス・シリーズなど、５つのシリーズを作り、１万４千人くらいだった定期会員の数が、ピークの時には４万５千人くらいまで増えました。

バンクーバーの人口は約150万人で、札幌と同じくらいだから、札幌でも定期会員を今の千人から４万５千人くらいまで増やそうと思えば、増やせるわけ。

名曲シリーズについては、今度、札響でも、６月から始めますが。

ＡにＡ線を合わせて、それを元に他の弦を調弦します。このＡのピッチ（高さ）は楽団によって多少違います。現在は、一般的に442ヘルツで札響もそうですが、ウィーン・フィルは445ヘルツです。



Q.　コンサートマスターはどうしてヴァイオリニストなのですか。

A.　オーケストラの中で最も全体への影響力がある人がコンサートマスターになるので、ヴァイオリンとは限りません。チェロの場合もあります。しかし、指揮者の指示を補ってオーケストラに合図をするにはヴァイオリンの方がアクションがわかりやすいし、何よりもソロ楽器として中心的な存在なのでオーケストラをリードしやすいからです。

――　自分の街にオーケストラがあるなんて、とても贅沢なことだと思うのですが、地元では、意外に、足を運ばないですね。

東京では、定期演奏会といっても、２日続けてあったり、マチネーがあったり、客層の厚みが違うんだなと思って、みていますが。

秋山　東京の人口が約１千万人で、オケが10個あるから、単純に10で割ってみると１個当たり100万人。札幌の人口は170万人だから、札響の方が、対象になる人口は多いんですよ。

レパートリーとＰＲの問題、それから演奏技術の向上、この三拍子がそろっていることが必要です。

札響団員の演奏活動にも注目

――　札響のメンバーによる室内楽のグループもいくつかありますね。

秋山　そうそう、あれはとてもいいです。アメリカなどでは、団員の室内楽の活動を、オーケストラの事務所が全部コントロールして、派遣するようにしている。それが、団員の収入にもプラスになって、みんなの励みにもなっている。いろんな多様性と可能性を探していかなくては。

それに、アメリカなんかは、オーケストラの事務局は、みんなボランティアですよ。50人も100人もいるんだけど、みんなボランティア。プロの金集め屋を雇って、寄付を集めますしね。

気軽に地元のオケを楽しむ

――　毎年、知事公館の庭や、道内の町で、グリーン・コンサートが夏に開かれます。

あの時は、たくさん聴きにいらっしゃるんですけれど、あの人たちが、もっと演奏会場の方にも来てくれるといいのにと、いつも思います。

秋山　チョイスがいっぱいあればいいわけ。クラシックは、もう一つ苦手だけれども、ポップスだったらという人でも、グリーン・コンサートだったら喜んでいつも行くという人たちでも、同じようなプログラムを、演奏会場で冬の間にシリーズでやるようになれば、聴きに来てくれる人が出てくるはず。

札響グリーンコンサート

――　来年の夏からは、中島公園に建設中の音楽ホールが、定期演奏会の会場になるそうですが、ご覧になりましたか。

秋山　今日、午前中に、案内してもらって、見てきました。すばらしいものになると思います。公園全体も整備するらしいし。

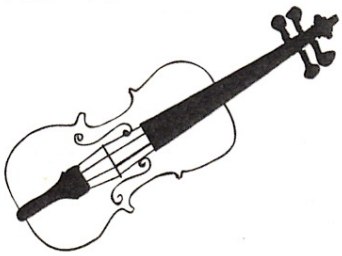
《臨時インタビュアの感想》

マエストロ秋山は、赤いベストを着た素敵なおじ様でした。札響をもっと多くの人たちに聴いてもらいたいと、熱意を込めて色々なアイディアを話してくださいました。指揮者って、音楽の才能だけではなく、経営のセンスも必要なんですね。

インタビューしたのは、Ｃ席の札幌定期会員歴（継続的に）約25年で、出席率？％の小林です。

Q.　第１ヴァイオリンと第２ヴァイオリンは楽器が違うのですか。

A. 同じ楽器です。合唱にたとえるとソプラノとアルトのような関係です。



Q.　ヴァイオリンとヴィオラはなにが違うのですか。

A. 楽器の大きさが一回り違います。ヴァイオリンの胴の長さは約35センチ、ヴィオラは約41センチあります。したがって、調弦もヴィオラの方がヴァイオリンより５度（ドとソの隔たりの関係）低いのです。弦楽器は音の高い弦から低い弦に第１弦、第２弦と呼びますが、ヴァイオリンの第２弦がヴィオラの第１弦と同じ音になります。一方、弓はヴィオラ用の方がヴァイオリンよりも短くて太めです。また、演奏する楽譜も違います。ヴィオラの楽譜はアルト記号（ハ音記号）で書いてあります。

札響と私
その出会い

仕事の関係で度々教育委員会の社会教育課を訪れた時期があった。丁度その頃は札響が設立して間もない頃であって、事務局長以下事務局員３名（？）は同室の社会教育課の職員以上に忙しく動き回っていたように思います。

たまたま演奏会の当日にであわし、裏方の忙しさを目のあたりにして、ステージ上の演奏とは違った面を知ったのです。何回目かの定期演奏の日“最後のシンフォニーは聴かせてもらえると思うので時間があったら手伝ってもらえませんか”の言葉を思い出し、手伝いを申し出てみた。会場の市民会館に着くと、すぐに食事をして下さいという。おにぎり２個の夕食を手伝いのチーフ（？）から渡された。

期待していなかったのでこれは大変に美味しかった。十数人の人達が机や椅子を出し、チラシを折り込み、貼り紙をし、座席表の確認をする。これは短時間でやらなければならない。皆てきぱきと仕事をしている。新米の私はただ感心するばかりであった。

練習中の札響

前半のプログラムが終わり、休憩になり、遅れてくるお客もひと段落するとチーフからお許しが出る。今日の札響の出来はどうだろうかと心をはずませて扉の中に入る。階段に立ち、ステージがやっと見えるところで聞き入る。(故)荒谷先生のタクトは快調のようだ。これがきっかけとなり、時間に余裕のある限り札響の手伝いを買って出るようになった。それは安サラリーマン時代の私にとっては大変うれしいプレゼントであった。その後、数多く通っているうちに事務局とつきあうことになってしまい、すっかり札響にのめり込んでしまった。

（三川嘉朗）

札響物語

札響は中島公園で生まれた

札幌コンサートホール「ＫＩＴＡＲＡ」を建設中の中島公園は札幌の音楽史上に大きな意味を持った場所です。

前川公美夫氏の「北海道音楽史」によると「大正７年に開道50年を記念して開催された北海道博覧会の時、博覧会の第一会場である中島公園の池のほとりには、円形の奏楽堂が設けられた」とあります。この頃あった札幌音楽隊のピックアップメンバーが連日フロトーの「マルタ」幻想曲、スッペの「詩人と農夫」序曲などを演奏しました。また、海軍の軍楽隊も来演して「カルメン」等を聴かせたようです。

また、昭和３年には、ＮＨＫ札幌放送局（ＪＯＩＫ）が中島公園の中に設けられ、現在の場所に移るまでの長期間、札幌の音楽関係者は中島公園に通って生放送に出演したのです。札幌放送局の開局を機に「中島オーケストラ」が作られ、専属の形で毎日練習をし、放送していたようです。厳しい毎日だったでしょう。

昭和36年７月１日に産声をあげた札響は中島児童会館の会議室で結団式を行い、ホールが練習会場になりました。

中島児童会館には札響の創立に関わり、育てられた方々の顔が重なります。結団式ではとても嬉しそうに笑顔を交わしていらした初代常任指揮者荒谷正雄氏、残念ながら今年３月１日に亡くなられました。また、式には、初代理事長故阿部謙夫氏、荒谷氏の留学中からの友人で道銀の初代頭取故島本融氏などのお顔がありました。９月６日の第１回定期演奏会を前に猛練習中の暑い練習場へひょっこり顔を出して激励して下さった指揮者の故近衛秀麿氏や音楽評論家の故嘱啓成(さっかけいせい)氏など大勢の方々のお世話になって育てられました。

来年、中島公園でまた新しい音楽の歴史が始まります。　（Ｙ.Ｔ.）

PLAYER'S TALK

札響　首席チェロ奏者

土田英順さん

1.2m
5kg（ケース込みで10kg）

チェロとの出会いは登校拒否がきっかけ

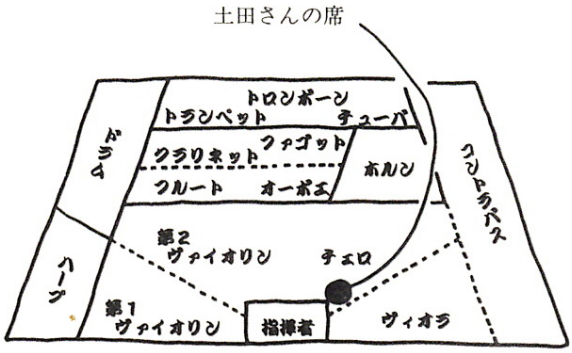
チェロを始めたのは、高校１年の時ですから、チェロとの付き合いは、もう40年以上になります。

中学時代は甲子園を夢見る野球少年だったので、学校の授業以外は、音楽とは無縁の生活でした。

親父がチェロの演奏家と友達で、一杯やった時に、希望した高校に進学できず、登校拒否気味になっていた息子（僕のことです）の話題になったらしくて、「じゃあレッスンに寄越してみなよ。」ということで、習い始めたんです。

札響に誘ってくれたシュバルツさん

江戸っ子の僕ですが、東京には住みたくない、自然の豊かな、人情味のあるところで演奏活動をしたいと思っていました。東京文化会館でリサイタルを開いた時、僕が楽屋に戻って来たら、入口に大きな



札響の配置

土田英順さん
（札響定期会員　土井るみ子さん　提供）

人が立ちふさがっていたんです。その人が、当時の札響の指揮者のシュバルツさんで、ペラペラの日本語で「札幌に来いよ。」って。それがきっかけで、1974年９月に札響に入り、北海道での暮らしも21年が過ぎました。

ミスっても、あわてないのがプロ？

演奏の小さなミスはコンサートの度にあります。一瞬、焦るけれども、知らない顔をしてごまかします。指揮者が気が付かないことも多いのではないでしょうか。気付いた時には、誰がまちがえたのかと、キョロキョロ犯人を見つけようとする顔がおもしろいんです。

巨匠たちの思い出

これまで、札響を含め、幾つかのオーケストラで、長いこと演奏活動を続けてきましたから、多くの指揮者やソリストとの出会いがありました。

立派な口髭を生やし、昔の王様のような風格があり、大きなビール樽を指揮者の控え室に置いて休憩時間や本番の前に飲んでいたアーサー・フィードラー（僕も毎日飲ませてもらってました）。

ボストンで貧乏暮らしをしていた時、ニューヨークから大きなダンボール箱いっぱいのインスタントラーメンを送ってくれて、家族ともども大感激した小澤征爾さん。ほかにも、ストコフスキー、ミュンシュ、バーンスタイン、若き日のアバド、琵琶の鶴田錦史さんなど、思い出は尽きません。

チェリストから、あなたに

札響を聴きに来てくれるあなたには、「ありがとう！」を百万回。そして、まだ聴いたことのないあなたには、百聞は一聴（？）に如かず、札響はあなたを夢の世界へご案内します！！

『ニューヨークの思い出』

どことなく雑然とした、見慣れない人々が往還する街角は不安になる。でも、貧困や不遇を背負った人たちの眼差しは、時として「諦」とか「悟」とかの単語を思い出させることがあり、数日して安心する。奥が深い安定感を感ずるので。これが私のニューヨーク（N.Y.）だ。

とめどもない多様、底知れぬ断層、そこから生じる混沌こそがN.Y.の特徴。不思議な土地N.Y.！！

ハドソン川を見おろすアパートから、犬の習性よろしく地域観察に出かける。眼前に聳えるツインタワー、これぞ世界貿易センタービルだ。アルミを強化した柱で形作られている味気ないビルだが、天候、日差しの角度によっては微妙に色が変化する。それを知ってからは、毎日見上げては写真を撮りまくった。その近辺には、市政、金融、証券、観光の施設がひしめき合い、喧噪だが、二つの有名な協会は、倫理の象徴のようにおだやかだ。

ウォール街は道幅は思ったより狭い。歩道は細い。そこに沢山の人がたむろしている。愛煙家が紫煙をくゆらせているのだった。観光客はお気の毒。厳しい条例が歩道を喫煙室にしてしまったかのようだ。吸いがらを捨てる人、それを集める人、仕事の住みわけ？とでも言ってそうな図柄がそこにある。

ビルを取りこわした。隣のビルの壁が見苦しい。そんなわけで壁画が描かれている。その絵は、後期印象派のスーラのもの。「ラ・グランド・ジャット島の日曜日の午後」。不況がもたらした景観の一つ。バッテリーパークの船着場は何時も自由の女神見物のため船待ち人が列をなす。その傍らで、アクロバットを演じたり、サックスを吹いたりする黒人が沢山いる。その日は日本人が一人、音楽も音声もなく「考える人」を演じている。「人間博物館」。サックスはソニー・ロリンズまがいだった。

ここの人たちはフェスタ好き。アベニュー、ストリートをホコ天にしてフードフェスタなどを毎週開く。と、そこには必ず、ビックバンドかコンボがひかえていて、これが楽しい。

チャイナタウンで「大根安いよ」と声をかけられる頃、私は帰国となる。今回もまた、アヴェリー・フィッシャー・ホールへはいけなかった。NYフィルとバーンスタインの本拠地なのに。

「音楽は最高の神秘的な体験だ」とバーンスタインは言った。それを私は、帰国して、何時も、札響の演奏で思い出すのだ。

（佐々木甫）

入会のご案内

「札響友の会」を結成します。会の目的は北海道で始めての音楽専用ホール「KITARA」がいよいよ来春誕生し利用が開始され、札響の活躍がますます期待されている今、札響を熱烈にサポートしていくことにあります。札響の演奏をより多くの方々に親しんでもらいたい、そんな思いから札響ファンのネットワークとしての「札響友の会」を結成しようとするものです。より多くの方々に札響の定期会員になって頂き、友の会の活動を通して、オーケストラを支えることができればいいなと思います。

友の会では、この「札響くらぶ」を機関誌として情報を会員にお届けするとともに、会員相互の意見交換や札響への要望・意見を伝える場を作っていきたいと思います。オーケストラがより身近になるような企画（団員との交流・リハーサル見学etc.）もみんなで考えていきたいと思っています。多くの方々に「札響友の会」にご入会頂きたくお誘い致します。

「札響友の会」設立総会を現在計画しております。詳細が決まり次第、皆様方にご連絡いたします。多数の皆様方にお集まり頂けますようお誘い致します。

お問い合せ・お申し込み先／札響友の会
札響事務局内　〒060 札幌市中央区北1条西13丁目
札幌市教育文化会館内
☎011-251-4774　Fax011-251-4776

FAN NETWORK

札響の響きは永遠に

マーラーが友人に宛てた手紙の中で"Musik muß immer ein Sehnen enthalten, ein Sehnen über die Dinge dieser Welt hinaus."（音楽はその中に常に憧れを含有していなければならない、この世のことがらを越えてゆく憧れ・・・・・）と、記している。時代が流転し、たとえ将来の札幌の街角に昔日の面影が残っていないようになったとしても、札響の響きは永遠に美しくあってほしい。後世に残るような美しい響きをいつも聴かせて欲しい。

鈴木重統

なんで定期会員になっているかって？

そりゃ、札響が好きだからさ。チケット代が割安になるってこともあるけれど、毎月演奏会場に足を運ぶことが、ちゃんと予定された音楽が自分の生活の一部になっているってことが、何となくリッチな気分なんだなぁ。それからさぁ、いつも同じ席で聴けるってのも、ここが自分だけの場所なんだなんて思えて、結構いい気分になれるもんだよね。いまは、いつも一緒にいたい人が見つかって、毎回となりの席で札響聴いているよ。

28歳 男性

札響一本の聴衆

私は、こと交響曲の生演奏については札響一本槍というかたよった聴衆です。

おつきあいは30年を越えていますが、札響サウンドにほぼ満足している組と思います。例えば、さきの武満追悼演奏会の音作りには、団の特徴がよく現れており、共鳴するものがありました。

しかし最近、日本各地の新進オケが活発で、わが札響が追われているようでたいへん気になります。

私もタコツボを決め込まず、他のオケのありようも聴いて、愛する札響の技の向上、独自性の発揮などを考えてみたいと思うこの頃です。あまり伝わってこないことですが、共演のソリストの札響評はどんなものなのでしょうか。

穂坂東作

編集後記

札響をもっと応援したい、もっと聴いて欲しいという仲間が集まり、ファンクラブ「札響友の会」を設立しようと、このような会報を作りました。気持ちばかり先行し、なかなか先に進まないという有り様でしたが、何とかまとめるに至りました。

私たちの活動にご賛同していただける方、この会報で何かを伝えたい方、そして、会報の作成に協力をしたいという方、是非ご連絡下さい。私どもと一緒に、札響のよさを、もっともっと札幌市民に、北海道民に伝えませんか。（いちろう）

この創刊準備号は、いってみれば楽譜に書きあげられる前のスケルトンといったところかも知れません。しかしながら、会報のモチーフは、およそおくみ取りいただけたのではないかと思います。続く第１号の編集にあたっては、より多くの皆さんのお力をいただき、札響をしっかりと支えていけるような会報にしたいと考えています。編集企画、レイアウト、紙名など、この方が…というものがありましたら、どうかご意見をお寄せ下さい。（圭）